

パーリ註釈文献における saddhā の一側面

—— okappanasaddhā に注目して ——

古 川 洋 平

はじめに

saddhā (「確信」, Skt. śraddhā。以下、引用以外は「s」と表記)は、「信」「信心」を表わす代表的な言葉として、パーリ語の聖典ニカーヤを奉ずる上座部大寺派だけでなく、インド仏教全体を通じて重視されてきた。しかしながら、sの基本的な性格には、未だ明らかでない部分が残っており¹⁾、今後は従来の研究で使用されてこなかったテキストを活用していく必要がある。

ニカーヤに用いられるsを大別していくと、「人」に対するsと「もの」「こと」に対するsに分けられ、さらに在家者・出家者など、そのsを具える者ごとに分類することができる。そのうち、最も多いのは如来に対する仏弟子のsで、五根など修道論の1つとしても重視され、これまでの研究でもよく取り上げられてきた。一方それ以外では、sの対象でもある釈尊のsが注目される²⁾。このsは、「信仰」の意味に限定されないsの性格をくみ上げるにあたって重要な視点と成り得るものの、その対象や内容が示されないという問題点がある。この点、註釈文献は、sの対象や内容を説明することがある上、sを定義し、分類説明してもいる。ニカーヤで或る用語の内容や特徴が明らかでなくとも、註釈文献がそれらを補足している場合は多い(あくまで後世の理解としてではあるが)。註釈文献中のs理解を整理することは、ニカーヤに用いられるsの性格を考察する上で必要な手順

1) Cf. Gethin[1992] pp. 106-116, 藤田[1992] pp. 123-126, 136-140, etc.

2) MN I, p. 164, Sn 77, 432, Th 694, Sv I, p. 247, Ja I, p. 79 (散文部分), etc.

(40)

であると考える。

以上の問題意識のもと、本稿では釈尊のsの1例として『奮励経』(Padhānasutta)を取り上げ、それに対する註釈Pj³⁾の説明を提示する。次に、註釈文献中のsを分類説明する記述を整理した後⁴⁾、Pjの理解を、これまでsと併用されながらも、単なる同意語としか見なされてこなかったokappanā⁵⁾(「確定」。以下引用以外は「o」と表記)の考察から明らかにしていく。

第1節『奮励経』中の釈尊のsaddhāとその註釈の説明

まず釈尊のsの1例として、釈尊の成道前後の事跡を伝えている『奮励経』の用例を提示する。ゴータマ(Gotama = 釈尊)が安穩の境地を得ようと苦行に励んでいると、そこに死魔(māra)が近づいてくる。死魔はゴータマに、生きることこそ大切であり、家庭生活に戻り世俗的な福德(puñña)を享受すべきであると語りかける。ゴータマは死魔の言葉を否定した後、次のように述べる。

私には確信がある。それから、勇敢さと洞察とが見つかる。このように私が自ら励んでいるのに、どうして君は命のことを尋ねるのか⁶⁾。

上の引用は、成道前とはいえ、教主である釈尊もまたsを具えていたことを示す重要な例と言える。しかしこの一文からだけでは、何に対するどのようなsで

3) パーリ語のテキストはPTS (Pali Text Society) 版を底本とし、適宜他の版を参照した。PTS版が未出版の複註文献については、ビルマ第六結集版(Chāttha Saṅgāyana CD (CSCD))を底本とし、ビルマ版(B^e)の出典に従う。略号はCPD (A Critical Pali Dictionary, begun by V. Trenckner, 1924-)のEpilegomenaに従う。

4) 註釈文献におけるsの分類については、既に宮下[2013]が大筋を紹介している。本論は宮下[2013]をふまえ、sの分類例の1つに焦点を当てるものである。

5) 「okappanāに就いてみると、これは…同意語を並挙したにすぎず、…重要なものとは考えられない」(藤田[1957] p. 107), 「また、okappanāの方も信の同意語を並挙したもので、重要な解釈とは思われない」(同p. 109注1)

6) atthi saddhā tato viriyaṃ, paññā ca mama vijjati evaṃ maṃ pahitattaṃ (pi)^{*1} kiṃ jīvaṃ anupucchasi. (Sn 432) ^{*1}()はeditorによる

あるのか明らかでない。そこで、註釈文献を参照すると、Pjが上掲の引用に対して次のように説明している。

こら、死魔よ、無上の寂靜という勝れた境地 (anuttara santivarapada) に対して確信なき者 (assaddha) となるならば、あるいは確信してはいても怠けている者となるのであれば、あるいは確信し勇敢さを発揮している場合であっても洞察が弱い者となるならば、その者に君が命を尋ねれば適当であろうが、しかし私には、無上の寂靜という勝れた境地に対する確定という確信 (okappanasaddhā) がある⁷⁾。

Pjはsを、次に言及される勇敢さ (virīya) や洞察 (paññā) を含めた五根の枠組みの中で理解し (Pj p. 388)、無上の寂靜という勝れた境地に対する「確定という確信」(okappanasaddhā = o-s) があると説明している。五根のうちの信根は、sを具える立派な仏弟子 (ariyasāvaka)⁸⁾ が如来の覚り (bodhi)、即ち世尊 (= 釈尊) が阿羅漢乃至覚者 (buddha) であると信じることと説明されるもの (SN V, pp. 196f. etc.)、この理解を成道前の釈尊のsに用いることは出来ない。そこでポイントとなるのは、「無上の寂靜という勝れた境地に対するo-s」の理解である。o-sとは、DN等の4つのニカーヤに対する註釈(4ニカーヤ註)で分類説明されるsの1つであるので、まずこのsを理解することが、Pjの説明を明らかにする上で必要となる。

第2節 saddhāの定義及び分類

5世紀頃スリランカで活躍したブッダゴーサは、シンハラ語で記された古註釈をもとに4ニカーヤ註を著す前に、Vismでsを心所の1つとして定義してい

7) are, māra, yo anuttare santivarapade assaddho bhavēyya, saddho pi vā kusīto, saddho āradhāvīriyo samāno pi vā duppañño, taṃ tvaṃ jīvitam anupucchamāno sobhēyyāsi, mayhaṃ pana anuttare santivarapade okappanasaddhā atthi, (Pj II, p. 388)

8) 立派な者(ariya)については榎本[2009]を参照されたい。

(42)

る⁹⁾。それによると、sは「確信すること」(saddahana)及びoを特性(lakkhaṇa)とし、「[心の汚れを]落ち着かせ澄み渡らせること」(pasādana)及び「跳躍」(pakkhandana)を本質的な働き(rasa)とし、「濁りなきこと」(akālussiya)及び「決意」(adhimutti)を附帯する様相(paccupatthāna)とし¹⁰⁾、「確信されるべきことがら」(saddheyyavatthu)及び四預流支¹¹⁾を直接因(padaṭṭhāna)とするものである(Vism p. 464)¹²⁾。一方でPjもまたsを定義し、Vismと同じくoをsの特性としている(Pj I, p. 144)¹³⁾。o-sはこのsの特性oが強調された語と考えられる。以下、この点をふまえ4ニカーヤ註中のsの分類説明を整理していく。

①七不退法中のsaddhāに対する理解

まず、DN 16, AN 7.23に説かれる、七不退法(satta aparihāniyā dhammā = s, hiri, ottappa, bahussuta, viriya, sati, paññā)中のsに対する註釈例を示す(ANの例には註釈箇所無し)。これらをもつ比丘達には、繁栄のみが期待され得て、衰退は期待され得ない。七不退法の7項目は、別の用例で七正法(satta saddhammā)とも称さ

9) Cf. 森[1984] pp. 92-104

10) adhimuttiと同義のadhimokkhaは、しばしばsと対置されるvicikicchāの捨離に関する註釈部分で、三宝に対する「確定に属する確信と呼ばれる決意がしきりである者」(okappaniya-saddhāsāṅkhāta-adhimokkhabahula)として言及される。(Sv III, p. 782 etc.)

11) Cf. 藤田[1957] pp. 98-102, [1992] pp. 127-129. sは預流者(sotāpanna)となることと関わりが深い。sを具えている者が、そのまま預流者であると理解される場合もある。(Spk II, p. 210)

12) oはVism成立以前よりsの特性とされている(Nett p. 28)。Vismを含めたsの定義とその背景についてはCf. Hayashi[2003] pp. 92-95. Vismのs定義に用いられる喩えは、奥田清明(聖應)先生記念論集掲載予定の林隆嗣先生の論文で検討されている。林先生には、註釈文献を扱うに際し必要な心得を数多く御教授頂いた。論文を参照させて頂いたことと合わせ、ここに深く感謝申し上げたい。

13) Pjのs定義はVismのそれと全同ではない。Vismはpasādanaをsの本質的な働きとするのに対し、Pjはoと共にsampasādaをsの特性とする(Pj I, p. 144)。もっとも、Sn 77の平行SN 7.2.1中のsに対し、Spkもsの特性をoとsampasādaに求めており(Spk I, p. 250)、Mpもsの分類説明の中(本節第③の例)で、sampasādanaをsの特性とするMilの理解(Mil p. 34)を引用しているから(Mp IV, p. 56)、Pjのs定義がVismのs定義と異質なものであるとまでは言えない。(Cf. Hayashi[2003] p. 93)

れる。(Cf. 本節用例③)

‘saddhā’ とは、確信を具えた者達。そのうち、到来する確信 (āgamaṇa-s = ā-s)、理解による確信 (adhigama-s = adhi-s)、澄み渡りという確信 (pasāda-s = p-s)、確定しての確信 (okappanā-s = o-s) という4つの確信がある。そのうち、一切を知る菩薩達には、到来する確信 (ā-s) が生じる。立派な人間達には、理解による確信 (adhi-s) が〔生じ〕る。一方、「仏・教法・僧団」と言われるものに対して、〔心の汚れが〕落ち着き澄み渡ることが澄み渡りという確信 (p-s) である。他方、〔心を〕確定してから、〔心を〕固定してから、確信すること¹⁴⁾ が確定による確信 (o-s) である¹⁵⁾。ここではその2種類 (p-s と o-s) とも意図されている。というのも、その確信 (o-s) を具えた者はヴァツカリ長老のような信解脱者 (saddhāvimutta) になるので¹⁶⁾。

②五精勤支中の saddhā に対する理解

続いて、DN, MN, AN に説かれる、五精勤支 (pañca pādhanīyaṅgāni = s, appabādha, asatha, viriya, paññā の5つ) 中の s に対する註釈例を示す。被註釈箇所 の s は、如来の菩提を確信し、世尊が阿羅漢乃至覚者であるとの s と説明されている¹⁷⁾。いず

14) *evam etan ti okkanditvā pakkhanditvā saddahanavasena kappanaṃ okappanaṃ.* (Sv-pt II, p. 165) 「件のことはその通りであると切り込んで、跳躍してから、確信することによって据えることが okappanā である」

15) *okappanasaddhā saddheyyavatthum oḡāhetvā anupavisitvā: evam etan ti paccakkhaṃ karontī viya pavattati.* (Sv-pt II, p. 165) 「確定という確信は確信されるべき事柄に飛び跳んで、入り込んでから、件のことはその通りであると直接に経験するかのように起こる」

16) *saddhā ti saddhāsampannā. tattha āgamaṇīyasaddhā adhigamasaddhā pasādasaddhā okappanasaddhā ti catubbidhā saddhā. tattha āgamaṇīyasaddhā sabbaññubodhisattānaṃ hoti, adhigamasaddhā ariyapuggalānaṃ, buddho dhammo saṅgho ti vutte pana pasādo pasādasaddhā, okappetvā pakappetvā pana saddhanaṃ okappanasaddhā. sā duvidhā pi idhāhippetā. tāya hi saddhāya samannāgato saddhāvimutto, Vakkalitherasadiṣo hoti.* (Sv II, p. 529)

17) MN II, p. 95 etc. 註釈は「如来によってしっかり見通されている (suppaṭivedha)」と確信すると説明し、その理由として、覚者に対する澄み渡り (pasāda) が強力な者の

(44)

れの用例も s を具えている者は比丘である。以下、便宜上 MN 85 の例に対する解釈を提示する。

‘saddho’ とは確信を具えている者。またこの確信とは、到来する確信 (ā-s)、理解による確信 (adhi-s)、確定という確信 (o-s)、澄み渡りという確信 (p-s) という 4 種類の確信である。そのうち、一切を知る菩薩達にとって、確信は作仏の決意 (abhinīhāra) 以降に到来していることから到来する確信 (ā-s) と言う。立派な仏弟子 (ariyasāvaka) 達にとって、〔確信〕は見通すこと (paṭivedha) によって達せられていることから理解による確信 (adhi-s) と言う。「仏・教法・僧団」と言われるものに対する、揺れ動かない状態によって確定すること¹⁸⁾ が、確定という確信 (o-s) と言う。〔心の汚れが〕落ち着き澄み渡ることの生起が、澄み渡りという確信 (p-s) と言う。ここでは確定という確信 (o-s) が意図されている¹⁹⁾。

③七正法中の saddhā に対する理解

最後に、AN 7.63 に説かれる、七正法中の s に対する註釈例を提示する。内容は②と同じく世尊が阿羅漢乃至覚者であるとの s であり、全体の項目は①で提示

奮励 (padhāna) と勇敢さ (viriya) が成就するためと述べる。(Ps III, p. 326 etc.)

18) *acalabhāvena okappanaṃ* “sammāsambuddho bhagavā, svākhyāto dhammo, suppaṭipanno saṅgho”ti kenaci akampiyabhāvena ratanattayaṅṅe ogāhitvā kappanaṃ.(Ps-pt II, p. 153) 「acalabhāvena okappanaṃ とは、‘世尊は正等覚者である。教法はよく説明されている。僧団はよく実践している’ という、何ものによっても動揺し得ない状態によって三宝の美德に飛び込んでから据えること」

19) *saddho* ti saddhāya samannāgato; saddhā pan’ esā āgamanasaddhā adhiḡamasaddhā*¹ okappanasaddhā pasādasaddhā ti catubbidhā. tatha sabbaññubodhisattānaṃ saddhā abhinīhārato paṭṭhāya āgatattā āgamanasaddhā nāma. ariyasāvakaṇaṃ paṭivedhena adhiḡatattā adhiḡamasaddhā*¹ nāma. buddho dhammo saṅgho ti vutte, acalabhāvena okappanaṃ okappanasaddhā nāma. pasāduppatti pasādasaddhā nāma. idha okappanasaddhā adhippetā. (Ps III, p. 325f.)

¹ PTS 版 adhiḡamasaddhā も、B^c (PTS 版異読及び CSCD) ・S^c に従い adhiḡamasaddhā とする。 同様の記述が Sv III, p. 1028f., Mp III, p. 257 にある。

した七不退法と同一である。本例では、このsを柱とする (saddhesika) 立派な仏弟子が、善からぬことや過失を捨離し、善きことや過失なきことを育んでいる。

‘saddho’ とは、他ならぬ確定という確信 (o-s)²⁰⁾ と、直接経験に基づく確信 (paccakkha-s) とを具えた者。そのうち、布施・戒等の結果を確信してから、布施等の福德の行為 (puññakaraṇa) に対する確信を、確定という確信 (o-s) という。修道によって到来した確信を、直接経験に基づく確信という。澄み渡りという確信 (p-s) というのもこれに他ならない²¹⁾。

以上3例のうち、①②はsを4種に分類説明し、③はその後半2種に言及する。①②で第1に挙げられる「到来する確信」(ā-s) は、菩薩達に作仏の決意 (abhinīhāra) 以降生じるsであり²²⁾、第2の「理解による確信」(adhi-s) は、立派な人間や仏弟子に生じ、見通すこと (paṭivedha) により達せられる。「澄み渡りという確信」(p-s) は、三宝に対し心が落ち着き澄み渡ることであり、修道によって到来した確信である直接経験に基づく確信 (paccakkha-s) の異名とされる。最後の「確定という確信」(o-s) は解釈が一定しない。①はoとsに前後関係を想定し、信解脱者が具えるsと説明する一方で、②は①のp-sと同じ三宝に対する²³⁾ 揺れ動かない状態によるoというsと説明する²⁴⁾。③は①と同一項目中のsで、sの内容は②と同じであるにも関わらず、①②どちらとも異なり、布施や戒の結果に関するsがo-sと考えられている²⁵⁾。

20) *okappanasaddhā* ti okkantitvā pakkhanditvā adhimuccanaṃ. (Mp-t (B^e) III, p. 191) 「okappanasaddhāとは、切り込んでから、跳躍してから決意すること」

21) *saddho* ti okappanasaddhāya c’ eva paccakkhasaddhāya ca samannāgato. tattha dānasīlādīnaṃ phalaṃ saddahitvā dānādipuññakaraṇe saddhā okappanasaddhā nāma. maggena āgatasaddhā paccakkhasaddhā nāma, pasādasaddhā ti pi eṣā va. (Mp IV, pp. 56)

22) この語の理解についてはCf. Yang-Gyu[2003] p. 34 n. 4, 宮下[2013] pp. (52f.)

23) 4分類を用いない例としてはCf. Ps I, p. 152 etc.

24) Yang-Gyu[2003]は、これらの定義の差の意義については明らかでないとする。(Yang-Gyu[2003] p. 34f. n.5)

25) 4分類を用いない例としてはCf. Sv I, p. 81, 298, Spk I, p. 60, etc.

(46)

4種のsを用いた解釈例に目を向けると²⁶⁾、ā-sとadhi-sの例は見受けられず²⁷⁾、p-sもo-sと併用されるのみで、単独には用いられない²⁸⁾。ā-sの場合、菩薩のsに言及する例が稀な点を考慮しても、先の『奮励経』に対するPjの説明には用いられないし、adhi-sについても、しばしばニカーヤで「立派な者」(ariya)がsを具えているにも拘らず、用いられない(Cf.上掲③の例)。おそらく、ニカーヤに菩薩や立派な者が登場する場合、特に言及せずともā-s, adhi-sを具えていると理解されていたのであろう。p-sはpra-√sadに由来する語と併用されるsと関わるかと思われたが、o-sかつp-sとされる解釈例にそのような側面は見受けられないので、ひとまずこれとは別立てされる必要がある²⁹⁾。以上から大まかに4種のsを区分けすれば、ā-s, adhi-sは菩薩と仏弟子というsを具える者の立場から³⁰⁾、p-s, o-sはsの性格や対象から区別されていると言える。これらの分類説明は、4ニカーヤ註以降に成立した諸註釈文献には見受けられない。従って、Pjを含めた諸註釈文献は、上掲の分類説明を背景に、4種のsを使用していると考えるのが自然であろう。

Pjのs理解について言えば、o-sのいずれかの説明をそのまま用いたとしても、

26) 4ニカーヤ註中の解釈例は以下の通り：Sv II, p. 529(p-s + o-s), III, p. 936(p-s + o-s), 1028f.(o-s), Ps III, p. 191(o-s), 193(okappaniya-s), 325f.(o-s), 426(o-s), Spk II, p. 174(o-s), 403(paccakkha-s), Mp III, p. 224(paccakkha-s + o-s), 257(o-s), 376(okappanaka-s), IV, p. 56f.(paccakkha-s(p-s) + o-s), 157 (2種のsとのみ言及), 163(o-s)。その他4ニカーヤ註以外の解釈例：Ja II, p. 369 (okappanaka-s。註釈部分), V, p. 147 (o-s。註釈部分), 398 (okappaniya-s。註釈部分), Nidd-a, II, p. 384(o-s)。

27) ただし、ā-sと理解可能な解釈例は見受けられる (Sv III, p. 896)。

28) ただし、p-sを異名とするpaccakkha-sの単独解釈例は認められる(Cf. 注26)。このsは、他者からの伝聞に基づかない直接に経験されたsとして用いられているが、paccakkha-sがp-sを異名とするにしても、両者が全く同一のsであるとは言い切れない。(Cf. 注15, 29)

29) 複註によれば、p-sは聞くことだけ(savanamatta)で澄み渡ることから生じる。(Sv-pt II, p. 165)

30) 複註によれば、ā-sには他者の指導(para-upadesa)無しに決意するという特徴(Sv-pt II, p. 165)、adhi-sには四諦を見通すこと(saccapāṭivedha)から到来し、最上の道果(阿羅漢向/果)と結びついているという特徴が見出せる。(Sv-pt II, p. 165f., III, p. 321)

それだけで Pj の意図が明らかに出来るわけではない。Sv は①②、Mp は②③ 2 つの解釈例を提示する一方で、①②の ā-s, adhi-s の説明にはほとんど相違がない。o-s の理解が一定しないのは、各ニカーヤ註の o-s 理解の相違を反映しているわけではなく、それぞれの解釈例で o-s を異なった側面から説明していることが背景にあると考えられる。次節では、この点をより深く考察するために、o-s の解釈例を整理していく。o-s が分類説明によって様々に理解される背景には、それらの解釈を可能にする、o-s の多岐にわたる性格があるのであろう³¹⁾。

第 3 節 okappanasaddhā の解釈例に見る saddhā の特徴

註釈における s の分類例を整理したところで、本節では o-s の単独解釈例に見られる s の特徴を整理する。解釈例はいずれも仏弟子の s であるが、それらは①如来に対する s と、②諸善法に対する s に大別出来る。前節②で提示した五精勤支中の s は前者に含まれる。

①如来に対する okappanasaddhā

まず前者について言えば、MN 70 で釈尊は修行者を 7 種に分けて説明している。その 7 種とは、俱分解脱者・慧解脱者・身証者・見到者・信解脱者 (saddhāvimutta)・随法行者・随信行者 (saddhānusārin) で、俱分解脱者と慧解脱者が無学に、それ以外の 5 つは有学に含まれ、無学になるまでの修道の視点から見れば、上掲の順序が凡そ逆になる。註釈は信解脱者を四向四果のうち預流果から阿羅漢向の間に、随信行者を預流向に配当させる (Ps III, p. 189f., 190f.)。以下、信解脱者の説明箇所を示す。

また比丘等よ、信解脱者とはどれでしょうか？比丘等よ、ここに一部の人は、物質を超越して鎮静している非物質的な諸の解脱、それらに身体 (集合

31) o-s は s の基底にある部分を意味するようである。saddhā n' atthi ti okappanaka-saddhā mattakam pi n' atthi. (Mp III, p. 376) 「saddhā n' atthi とは、単なる確定することという確信さえも (okappanakasaddhā mattakam pi) ない」

(48)

体)によって接触して時を過ごすではありません。また、彼の洞察によって〔一部の諸の漏れ込むもの(漏)〕を見て、〔それら〕一部の諸の漏れ込むものが、完全に尽くされたものとなります。しかし、彼の如来に対する確信は入り込んだもの(nivīṭṭha)、根の生じているもの(mūlajāta)、確立したものとなります(patitṭhita)。比丘等よ、彼が信解脱者と言われます³²⁾。

本例によれば、信解脱者とは洞察により漏が完全に尽くされたわけではないものの、如来に対するsが入り込み、根が生じ、確立している者のことである³³⁾(Cf. 第2節①の引用末尾)。信解脱者の下に位置する随信行者は、如来に対する単なるs(s-matta)と単なる愛情(pemamatta)があり、五根が生じた者とされるものの(MN I, p. 479)、註釈は随信行者のsをo-sとは説明しない。随信行者は他の例で「素早い洞察をもつもの」(hāsapañña)、「敏速な洞察をもつもの」(javanapañña)でないと形容され(SN V, pp. 377)、六根等が無常であるという法を確信し、決意する(<adhi-√muc)者と説明される(SN III, pp. 225ff.)。このような随信行者の上に信解脱者があると考えれば、信解脱者とは、仏の説示した法を信じるだけでなく洞察によって理解した上で、法を説示した如来を確固不動に信じる者であると言える³⁴⁾(Cf. 第2節②のo-s理解)。信解脱者の如来に対するsの背景には、如来の説法とそれに対する理解があるのである。

さらにこの如来に対するo-sは、比丘(=釈尊 Cf. Ps III, p. 426)が三毒に汚されていない者として行動しているのかどうかを見ること(<sam-anu-√pās)を通じて生じたり(MN II, pp. 171ff.)、如来の説法により三宝に対し落ち着き澄み渡った

32) katamo ca bhikkhave puggalo saddhāvimutto: idha bhikkhave ekacco puggalo ye te santā vimokkhā atikkamma rūpe āruppā te na kāyena phassitvā viharati, paññāya c' assa disvā ekacce āsavā parikkhīṇā honti, Tathāgate c' assa saddhā nivīṭṭhā hoti mūlajāta patitṭhitā. ayaṃ vuccati bhikkhave puggalo saddhāvimutto. (MN I, p. 478)

33) 註釈は「入り込み」等、いずれも預流者と関わらせて理解する。(Sv III, p. 864, Ps II, p. 388, etc.)

34) Ppは信解脱者を四諦を如実知見し、如来の教えを洞察によってよく見て、実践している者とする。(Pp p. 15)

(<pra-√ sad) 際に生じ、「見ることを根本とする」(dassanamūlika)、死魔によって奪われ得ない (<a-sam-√ hr) s とともに述べられる (MN I, p.320)³⁵⁾。この2つのsは、比丘の行動に探りを入れ (<sam-anu-√ is)、信じるに相応しい者であるのかを現前で見ても確かめることを通じて生じており、o-sが何の根拠もなく信じるような、妄信的なものではないと考えられていたことを示す³⁶⁾。

② 諸善法に対する okappanasaddhā

後者の諸善法 (kusalā dhammā) に対する o-s は、SN 16.7, AN 6.45, 9.2に見られ、いずれも五有学力 (s, hiri, ottappa, viriya, paññā) 中の、仏弟子にとってのsとして用いられている。諸善法に関して言えば、DN 28で釈尊は、諸善法として五根などの三十七菩提分法と解脱知見の定型表現を挙げている (DN III, p. 102)。諸善法は如来から説示されるものであり、その諸善法には解脱に至るための手段だけではなく、目標である解脱知見も含まれている³⁷⁾。仏弟子達は、説法を通じ何が善きことであるのか理解し、解脱と解脱に至る道筋とを善きことがらとして受け入れ、目指していく (Cf. 本節①で指摘した随信行者に生じる五根)。このように考えれば、諸善法に対する o-s とは、仏弟子が如来の説法を聞く中で諸善法を理解することを背景とした、それらの諸善法を達成していくためのsであると言える³⁸⁾。

35) 本例はo-sの解釈例ではないが、sをoと説明する例であるので、o-sの1例と判断した。
(Ps II, p. 388)

36) 一方で、洞察によって対象を目の当たりにする (sacchi-karoti) 場合、sは生じない (Cf. SN V, p. 221, Ps II, p. 171, Spk III, p. 100)。現前にあるものを見るのと同じく事実として見るので、確信する必要がないのであろう。(Cf. Peṭ p. 171)

37) 五根を例にとると、信根に関する諸法は教法とも理解できる。(SN V, pp. 225f.)

38) 五根等でsの後に列挙される viriyaなどもsを背景にしていると理解できる (Nett p. 15)。如来に対する o-s を具えている者には意欲 (chanda) が沸く (Cf. Paṭis II, p. 23)。彼は奮励し、洞察によって真理を体得していく (MN II, p. 173, 479)。「これを修めることでこれが達成される」と確信しているからこそ、viriyaなど後の修道項目が成就するのであろう。(Cf. 第1節のPjのs理解, 注17)

(50)

o-sの対象を2つに分けて考察すると、如来に対するo-sと諸善法に対するo-sは、いずれも如来の説法を背景に成立していると考えられる。o-sは如来によって説示された教法を理解することから生じ、その前提として、仏弟子は目の前にいる如来の説法を含む行動をくまなく見て確認している。如来に対するo-sを具えた者は諸善法の達成を確信し、そのために精進し、最終的に洞察によって解脱を体得していく。このように、o-sの前後には凡そ、現前のものを見る→教法を理解する→o-sを具える→諸善法を修める→解脱という流れが認められるのである。一連の流れは、現前のものを見ることを出発点としている。この点についてはoが大きく関わっていると思われるので、次節にて検討していく。

第4節 okappanā (<ava-√kalp) の性格について

本論で「確定」と訳しているo (<ava-√kalp) は、sの類義語と考えられているものの³⁹⁾、名詞化してsと併用されるようになる以前は、sとは直接関わりなく用いられてきた⁴⁰⁾。sとの併用はNiddやアビダンマ以降である⁴¹⁾。oは蔵外文献や註釈文献でも同様に使用されることが多いが、中にはoの特徴も見出すことが出来る⁴²⁾。MN 2とAN 6.58には7種の漏(āsava)の捨離について解説する箇所があり、その中の「回避すること」(parivajjana)によって捨離されるべき漏の解説部分に、次の一文がある。

39) Cf. CPD s.v. okappanā

40) Vin IV, p. 4, MN I, p. 11, 249, etc. 仏教以前のテキストはava-√kalpを「信じる」の意味で用いていない。(Cf. PW s.v. ava-√kalp)

41) Nidd II, p. 265, Dhs p. 10f., etc.

42) 註釈文献に見られるoの解釈例: Buddhādinaṃ guṇe ogāhati, bhinditvā viya anupavisatī ti okappanā.(As p. 145)「ブツダ等々の美徳に飛び込み、割り入るかのように入り込んでいく、ということでokappanāである」; okappetvā anupavisitvā aggahaṇaṃ anokappanā.(Vibh-a p. 499)「確定してから、入り込んでから、把握しないことがanokappanāである」; …evam etan ti okappanti...(Thī-a p. 268)「…彼等は‘件のことはその通りである’と確定する…」; tattha okappanaṃ saddahanavasena ārammaṇassa ogāhaṇaṃ nicchayo. (Nett-a p. 93)「そのうち、確信することによって対象に飛び込むこと、決断がokappanaである」

ある姿の坐処でない所に坐っており (nisinnam)、ある姿の活動範囲でない所で活動しており (carantam)、ある姿の悪しき盟友達への許に親しんでいるならば (bhajantam)、(その比丘を) 知者たる同梵行者達が、諸の悪しき位置にいると確定することになる (okappeyyum) ところの、その坐処でない所と、その活動範囲でない所と、これら悪しき盟友達を、彼は根源的に正しく気をつけて回避します⁴³⁾。

上の引用の下線部に対し、註釈は次のように説明する。

‘okappeyyum’ とは、「確かに (addhā)、この尊者は為したし (akāsi)、また為すことになる (karissati)」と確信することになる、「決意することになる」⁴⁴⁾。

ニカーヤでは、現在分詞形で示されている行動を行っている比丘がそのような悪しき位置にいると、同梵行者達によって確定されている。これに対し註釈は、過去や未来の状況について、しかと確信することであると説明する。つまり註釈は、現前の比丘の悪しき行動を見ることを根拠として⁴⁵⁾、過去に同様に為したし、未来も同様に為すであろうと確信することになると説明しているのである。さらに小部經典に含まれる Paṭiṣ にも次のようにある。

43) yathārūpe anāsane nisinnam yathārūpe agocare carantam yathārūpe pāpake mitte bhajantam viññū sabrahmacārī pāpakesu thānesu okappeyyum, so tañ ca anāsanam tañ ca agocaram te ca pāpake mitte paṭisankhā yoniso parivajjeti. (MN I, p. 11) * AN III, p. 389 もほぼ同文。

44) okappeyyum ti saddaheyyum [adhimucceyyum]*¹, addhā ayam āyasmā akāsi vā karissati vā ti. (Ps I, p. 81) *¹ AN 6.58 の例に対する註釈箇所 (Mp III, p. 398) にはさらに [] 内あり。

45) asati pi mahārāja pāṭihīre caritam disvā suparisuddham okappettabbam nitṭham gantabbam saddahitabbam: suparinibbuto ayam Buddhaputto ti. (Mil p. 309f.) 「大王よ、たとえ驚くべきことがなくとも、(般涅槃している者の) よくすっかり清まっている行いを見てから、「このブツダの息子はしかと般涅槃している」と確定され、決定され、信ぜられるべきです」; aparam pi bhante uttarim kāraṇam brūhi, yenaṇam kāraṇena okappeyyam ti. (Mil p. 150) 「立派な方よ、さらにまた、その根拠によって私が確定できる一層の根拠を語って下さい」

(52)

知者たる同梵行者達が、ある状態で活動している者に対して (carantam)、ある状態で時を過ごしている者に対して (viharantam)、「確かに (addhā)、この尊者はあるいは達成しているし (patto)、あるいは達成することになる (pāpunissati)」「と」諸の奥深い位置にいと確定できる (okappeyyum) ような⁴⁶⁾ 活動と時の過ごし方が、覚られたもの、見通されたもの (paṭividdha) となる⁴⁷⁾。

本例の *ava-√kalp* は、先の場合と異なり肯定的に用いられているものの、現在分詞で示されている行動を行っている者を確定するという基本的な構造は同じである。しかも、前掲の註釈にあった *ava-√kalp* の内容を示す「 」部分が本文に用いられている（註釈で過去形であった部分が、Paṭis では過去分詞形となっている）。これらの引用から、少なくとも Paṭis から註釈文献にかけて、o には今、目の前にあるものを見ることを通じて、見えない過去や未来の状況を、しかと確定していくという特徴があったことが分かるのである。

以上指摘した特徴を、註釈文献で用いられる o の性格として位置付ければ、o-s が種々に説明されている意図が見えてくるのではないだろうか。第2節で分類説明された o-s のうち、②の確固不動の側面は「確かに」の点に一致し、③の行為の結果に関する o-s は、過去あるいは未来を確定していく点と共通している。①の説明は s の背景に o があるという理解であるから、第3節で指摘したように、現前にあるものを見て確定する点が s に結びついていると理解していると考えられる。この o の性格を起点とすれば、o-s を「現前のものを見ることを通じて、過去や未来の見えない（目の当たりにしていない）ことがらを、確固不動に確信すること」と見なし得る⁴⁸⁾。o-s に対する種々の理解は、各々が註釈箇所文脈に

46) *okappeyyun ti saddaheyyuṃ adhimucceyyuṃ*. (Paṭis II, p. 21) 「okappeyyum とは、確信できるような、決意できるような」

47) *cāro ca vihāro ca anubuddho hoti paṭividdho, yathā carantaṃ yathā viharantaṃ viññū sabrahmacārī gambhīresu ṭhānesu okappeyyuṃ, addhā ayam āyasmā patto vā pāpunissati vā*. (Paṭis II, p. 19)

48) Barua 及び Saibaba は Child s.v. *saddhā* を元に o-s を世俗的なうわべ上の s と理解するが

じて、上に提示した多岐にわたる *o-s* の内容やあり方などそれぞれ一端を取り上げて説明しているのであろう⁴⁹⁾。

第5節 考察と結論

これまでの検討をふまえ、再び『奮勵経』中の *s* に対する *Pj* の理解を考察し、結論とする。*Pj* が *o-s* の対象として提示する「無上の寂靜という勝れた境地」(*anuttara santivarapada*) は、釈尊が苦行を経て四禪・三明によって成道したことを伝えている、釈尊の成道伝承の中に言及されている。この中で釈尊は、「何が善きことであるのかを探し求める者」(*kiṃkusalagavesin*) として (Cf. 第3節②)、無上の寂靜という勝れた境地、即ち涅槃⁵⁰⁾ を求めて2人の仙人に近づいている (MN I, p. 163 etc.)。 *Pj* は、釈尊の成道伝承中の出家直後に見られるこの語を *o-s* の対象とすることで、出家修行の到達点たる寂靜の境地を見据えているのである。この視点は第2節③で提示した行為の結果に関する *o-s* の理解に近い。ここに、第3節②で検討した解脱知見を含む諸善法達成のための *o-s* の側面と、第4節で指摘した *o* の性格を加味すれば、一定の理解に達することが出来よう。即ち、『奮勵経』中の *s* に対し *Pj* は、ゴータマが成道前の段階であることを前提とした上で、「私はこの先、確かに寂靜という勝れた境地に達するであろう」という、釈尊自身の将来の成道達成に対する *s* と理解していると考えられる⁵¹⁾。釈尊のこの *s* は、奮勵 (を含めた出家生活) という現在の行為の結果として得られる境地に対する *o-s* であり、現前のものを見ることを通じて得られ、死魔によって奪われ得ない

(Barua[1983] p. 333, 335f., Saibabal[2005] p. 137f.)、そう理解出来るだけの根拠は見出せない。CPD s.v. *okappanā* が上掲 Child の *saddhā* 理解の誤謬を指摘していることから、誤りであると考えられる。

- 49) 第2節②の如来の覚りに対する *o-s* にも、過去に如来が覚った、その如来の覚りを、理解を通じて信じるという側面があるのであろう。
- 50) *anuttaram santivarapadam* ti uttamaṃ santisaṅkhātaṃ varapadam. nibbānaṃ pariyesamāno ti attho. (Ps II, p. 171) 「*anuttaram santivarapadam* とは、最上の寂靜と呼ばれる勝れた境地を。涅槃を捜し求めながら、という意味である」
- 51) 宮下氏はこの *o-s* を寂靜の境地の實在に対する *s* であると強調するが (宮下 [2013] p. (50))、筆者は實在ではなく、因果関係に対する *s* の枠組みの中で理解した。

確固不動のものである。

おわりに

以上、『奮励経』に対する Pj の s 理解の解明を軸に、s の定義や分類例を整理し、o-s の検討を行ってきた。仏弟子の o-s はいずれも如来の説法を背景にしていると考えられ、無師独悟たる釈尊の s とは区別されている。もっとも、本論で取り上げた自身の解脱の達成を見据えるという意味での s は仏弟子の s にも認められるので、何も釈尊に特有のものではない。最後にその 1 例を提示し、本論を終える。ニカーヤには s を伴って出家するという定型表現がしばしば用いられるが、その s の内容が示されている場合がある。

しかもアヌルツダ達よ、そのあなた方は王によって連れて行かれた者達として、家から家でないところに出家したのでは決してありません。盗人によって連れて行かれた者達として……ありません。借金に苦しんで……ありません。恐れに苦しんで……ありません。生活に促されて……ありません。そうではなくて、「私は誕生・老い・死によって、諸の愁い・悲しみ・苦痛・憂い・苛立ちによって圧倒されている。苦によって圧倒され、苦によって征服されている。〔しかし、〕この苦のあつまりすべての終末が洞察られ得る」と、アヌルツダ達よ、あなた方はこのように、確信によって家から家でないところに出家したのではないのですか？⁵²⁾

「 」内に示される s の内容は、出家する者自身が苦によって圧倒されているとの自覚と、その苦の終末が洞察られ得るとの思いからなり、s の内容であると

52) te kho pana tumhe Anuruddhā n'eva rājābhinīṭā agārasmā anagāriyaṃ pabbajitā, na corābhinīṭā.....na iṇaṭṭā.....na bhayaṭṭā.....na ājīvikāpakatā..... api ca kho 'mhi otiṇṇo jātiyā jarāya maraṇena sokehi paridevehi dukkhehi domanassehi upāyāsehi, dukkhotiṇṇo dukkhapareto, app'eva nāma imassa kevalassa dukkhakkhandhassa antakiriya paññāyethā ti, nanu tumhe, Anuruddhā evaṃ saddhā agārasmā anagāriyaṃ pabbajitā ti. (MN I, p. 463)

同時に、出家の動機・目的でもある。註釈の分類説明は出家に伴う s に言及しないものの、出家生活を通じて解脱という結果が達成され得るという s が、ニカーヤの段階から用いられてきたことに違いはない。註釈文献が分類し、解釈に用いる o-s の性格そのものは、そう説明されなくともニカーヤ中の s に確かに息衝いていると言えよう。

【参考二次文献】 * 紙数の関係上、必要最低限の言及に留めた

榎本[2009] 榎本文雄 「「四聖諦」の原意とインド仏教における「聖」」, 『印度哲学仏教学』, 第24号, 2009年, pp. (1)-(19).

藤田[1957] 藤田宏達 「原始仏教における信の形態」, 『北海道大學文學部紀要』, 第6号, 1957年3号, pp. 65-110.

藤田[1992] 藤田宏達 「原始仏教における信」, 『仏教思想 11 信』, 平楽寺書店, 1992年, pp. 91-142.

宮下[2013] 宮下晴輝 「ブツダゴーサの注釈に見られる四種の信について」, 『福原隆善先生古稀記念論集 佛法僧論集』, 第1巻, 山喜房仏書林, 2013年, pp. (43)-(56).

森[1984] 森祖道 『パーリ仏教註釈文献の研究 ——アッタカターの上座部的様相』, 山喜房仏書林, 1984年

Barua[1983] B. M. Barua, Faith in *Buddhism*, *Buddhistic Studies*, Indological Book House, pp. 329-349, Delhi, 1931, rep. 1983.

Gethin[1992] R. M. L. Gethin, *The Buddhist Path to Awakening: A Study of Bodhi-Pakkhiyā Dhammā*, E. J. Brill, Leiden. New York. Köln, 1992.

Hayashi[2003] Takatsugu Hayashi, “The Vimuttimagga and Early Post-Canonical Literature (I)”, 『佛教研究』 第31号, pp. 91-122, 2003.

Saibaba[2005] V. V. S. Saibaba, *Faith and Devotion in Theravāda Buddhism*, Emerging Perceptions in Buddhist Studies, No. 20, D. K. Printworld (P) Ltd., New Delhi, 2005.

paridevehi dukkhehi domanassehi upāyāsehi, dukkhotiṇṇo dukkhapareto, app’ eva nāma imassa kevalassa dukkhakkhandhassa antakiriya paññāyethā ti, nanu tumhe, Anuruddhā evaṃ saddhā agārasmā anagāriyaṃ pabbajitā ti. (MN I, p. 463).

(56)

Yang-Gyu[2003] Yang-Gyu An, *The Buddha's Last Days Buddhaghosa's Commentary on the Mahāparinibbāna Sutta*, The Pali Text Society, Oxford, 2003.

(ふるかわ ようへい・委嘱研究員)

One Aspect of *Saddhā* (Skt. *Śraddhā*) in Theravāda Buddhism, Focusing on *Okappanasaddhā* in Pāli Commentaries

Yohei Furukawa

In this paper, I make a research on the understanding of *Pj* about the Buddha's *saddhā* (Skt. *śraddhā*, confidence) in the *Padhānasutta*.

Pj comments that the Buddha's *saddhā* means *okappanasaddhā* (confidence of firm assurance) for *santivarapada* (excellent position of tranquility = *nibbāna*). On the other hand, *Sv*, *Ps*, and *Mp* sort *saddhā* into four aspects, viz. *āgamanasaddhā*, *adhigamasaddhā*, *pasādasaddhā*, and *okappanasaddhā*. According to these commentaries, *okappanasaddhā* has several meanings, but they don't go along with *Pj*'s understanding. However, *okappanā* described in *Ps*, *Mp*, and *Paṭis* is characterized as a word indicating that by seeing facts at present, the unseeable state in the past or the future is to be certain. The different meanings of *okappanasaddhā* found in *Pj*, *Sv*, *Ps*, and *Mp* can be consolidated in this point of view.

As a result, I conclude that *Pj* understands the Buddha's *saddhā* as his firm confidence about attaining tranquility in the future.